

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 社寺参詣と聖地巡礼研究の研究動向

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高田, 彩 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000601">https://doi.org/10.57529/0002000601</a>

## 社寺参詣と聖地巡礼研究の研究動向

高田 彩

### はじめに

従来、宗教学において、旅行や観光というテーマは、世俗的な意味合いを多分に含むとして、研究の対象として扱うことが難しいとされてきた。しかし近年、現代の宗教を取り巻く状況を捕捉するための一つの方法として、「ツーリズム」に着目する研究が提出されている。

現代における宗教状況は、明確化と拡散化という相反するものが同時に生じ、宗教領域の境界が流動化しつつあると言われている [山中編2012] [岡本2012]。また、このような状況において、宗教と非宗教、聖と俗などの二項対立的な見方を用いて現代宗教の諸相を描くことは困難であるという [岡本2012]。

このような現代の宗教のあり方を総体的に捉えるために、信仰を共にし、宗教活動を行う宗教集団や、伝承を共有する地域共同体の枠を超えて人々を取り結ぶ関係性、彼らの意識の多様性をツーリズムの視点から分析しようとする研究が提出されてきた [山中編2012]。

上述の宗教とツーリズムに関する研究は、観光人類学における、ホスト・ゲスト論を参照して議論が進められてきた。現代の宗教状況を対象化する宗教ツーリズム研究において、以上の視点から様々な研究成果が積み上げられてきた。一方で、ツーリズムの担い手の内実を注視してみると、実際は、ホストやゲスト、メーカー、プロデューサーというカテゴリーで一括りにすることは困難であることに気がつく。例えば、ゲストを迎え入れるホスト側の聖地や寺社仏閣には、直接的に運営に関わる宗教的職能者だけでなく、聖地を維持、管理するために様々な役割を担っている人々が存在する。また、聖地を訪れるゲスト側にも、様々な動機や目的を持つ人々が存在する。

筆者は、このような各担い手が、実際にどのような働きをしているのか、その活動の実態にも注目して、具体的な担い手像を描くことが必要だと考えている。上述の作業を行うことで、現代日本の宗教を取り巻く動きをより詳細に捉えることができるのではないだろうか。

そのような問題関心のもと、本稿では、ツーリズムを社寺や聖地の運営に対する一つの戦略と捉え、ツーリズムが、社寺や聖地にどのような影響を与えたのか、社寺や聖地をどのように変化させたのか考察することを目指す。その際、社寺や聖地の運営に関わり、その場所を維持、機能させるための役割を果たす担い手に注目して、研究史の整理を行っていく。

そのために、本稿では、まず、社寺参詣研究や聖地巡礼研究の大まかな流れを整理し、宗教ツーリズム研究が何を対象としてきたのか、何を明らかにしようとしてきたのかを確認する。加えて、宗教ツーリズム研究が、これまでの社寺参詣研究や聖地巡礼研究に、どのような影響を与えたのかを検討を行う。その上で、宗教ツーリズム研究と社寺参詣研究、聖地巡礼研究を架橋する視点を検討してみたい。

## 1 社寺参詣研究

全国に点在する、有名な社寺に参詣することは、交通網が未発達であった時代には、費用や時間、また道中の安全という観点から多くの負担があった。そこで、社寺参詣のための「講」が各地で結成された。このような社寺参詣のための講は、参拝講、登拝講と呼ばれ、講員たちは講の中からくじ引きなどの方法で、代参に向かう数名の代表者を選出し、各自積み立てていた講金をその代表者の参詣の費用とした。代表者は、講を代表して社寺に参詣するとともに、社寺で授かった札を持ち帰り、講員に配布した。

櫻井徳太郎は、『講集団成立過程の研究』にて、有名な社寺に参拝するために全国各地で結成された参拝講・代参講について考察している〔櫻井1962〕。なかでも、全国的な広がりを持つ講として、伊勢神宮へ参る伊勢講や、紀州熊野権現に詣でる熊野講、出雲大社の大社講、富士山へ登り、浅間神社へ参る富士講・浅間講などを取り上げている〔櫻井1962：247〕。

次に、社寺参詣を交通史の観点から研究した成果として、新城常三の『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』が挙げられる。新城は、中世末期から近世にかけての参詣の民衆化、物見遊山化の実態を明らかにした〔新城1982〕。

このように櫻井、新城の研究によって、社寺参詣に関わる担い手である御師などの民間宗教者や、地域社会で結成された講と、講員が研究対象として議論の俎上に上げられ、彼らの活動についての研究の基盤が整えられたといえよう。

また、民間宗教者や講の活動については、山岳宗教に関する研究においても議論が展開されてきた。山岳宗教を対象とした研究の代表的な成果として1975（昭和50）～1984（昭和59）年にかけて刊行された五来重監修『山岳宗教史研究叢書』全18巻が挙げられる。『山岳宗教史研究叢書』は第一期が比叡山、高野山、吉野、熊野、出羽三山などに関する論文が収録されており、それら主要な山岳宗教の歴史的展開を描いている。続いて第二期は、地方の山岳を対象とした論考が収められている。

『山岳宗教史研究叢書』に収められている論文は、山内に残されていた様々な資料—御師、修験者、山伏、僧侶、神職などの宗教的職能者の日記や修行に関する記録、宗教的職能者の名簿、社寺が残した祭礼や祭典に関する記録、明細簿、山内の規約、幕藩や本山との書簡、各地の講員との書簡、裁判の記録、講帳（講の名簿）、宿坊の宿泊者名簿などを資料して、一山の歴史と展開、山内の行事や宗教的職能者の活動、山内経済、山内組織、講集団との関わりなどの多様な主題を明らかにしてきた。

一方で、上述の資料は、ほとんどが御師、修験者、山伏、僧侶、神職などが作成したものであることから、山岳宗教に関する研究は、宗教的職能者の目線から進められてきたといえよう。

また、1985（昭和60）～1999（平成11）年にかけて刊行された『民衆宗教史叢書』でも、山岳宗教を扱った研究が発表されている<sup>1</sup>。これらの研究の基となった資料も、上述の性格を持っており、宗教的職能者の視点から、さらに研究が発展していった。

引き続き、地方の山岳を対象とする一山の歴史や信仰史を究明する研究が提出されていくが、その中で、宗教的職能者側の視点だけでなく、宗教的職能者の布教活動を受容して、各地で結成された講集団側の視点を含めて研究を進めていこうとする態度が見られるようになる。例えば、岩鼻通明、廣渡正利、西海賢二、由谷裕哉、菅原寿清、福江充、中山郁、西村

敏也などの研究が挙げられる<sup>2</sup>。

岩鼻は、出羽三山信仰が地域社会でどのように受容されていたのか、またどのように展開していったのかを明らかにするため、旅日記の分析を行った〔岩鼻1992〕。また、中山は、木曾御岳講が関東地方でどのように展開していったのか、各地の講においてどのような実践が行われていたのかを明らかにした〔中山2007〕。そして、西海は、富士信仰の受容と展開を、富士講の構成員と地域社会、とりわけ地場産業や職能集団に注目してまとめた〔西海2008〕。加えて、西村は三峰信仰の在地展開に注目し、在地でどのような儀礼が行われているのか、またどのような利益が期待されているのかを論じた〔西村2009〕。

近年の山岳宗教に関する研究においては、これまで資料的な制約から研究が進んでこなかった、近現代を扱う成果も提出されている。天田顕徳は、近現代における行者や講集団の容態を、吉野と熊野の事例から明らかにしている〔天田2019〕。そこで天田は現代において山岳が観光資源化され、山伏や行者自体も観光の対象となる事態が発生していることを指摘した〔天田2019〕<sup>3</sup>。

以上のような一山史に関する研究に登場する対象を大きく分けると、山伏や御師などの宗教的職能者と、各地で結成された講集団に所属する講員の二つに分けることができる。

また、原淳一郎は、山岳宗教の研究状況を概観し、次のように述べている。「一つの山岳信仰を対象とし、その歴史の変遷を掘り起こすとともに、修験・御師等の宗教者、信仰圏、山岳宗教集落、講集団、幕藩権力との関係、本末など多様な主題を織り交ぜて、総合的にその山岳宗教の実態を明らかにしようとする研究方法が多く見られるようになった」〔原2007：7-8〕。

こうした、宗教的職能者の宗教活動と、それを地域社会で受容する講集団の関係性についての研究を架橋する視点として、山外から参詣地としての山岳に働きに来て、労働力を提供することで、参詣地としての山岳を支える人々と、その役割を検討する研究が提出されている。

このような、山岳宗教を運営の面から検討しようとする研究では、強力という存在に焦点を当て、宗教的職能者と信者以外の存在を対象化する成果が提出されている〔筒井2004〕〔小林2013〕。

筒井裕は、鳥海山において山内に物資を運搬する強力に着目し、彼らの労働実態を明らかにした〔筒井2004〕。同論考で筒井は、「山岳を聖地として利用する宗教者や崇敬者の挙動に注目する研究が多くなされる一方で、山中に物資を運搬することにより、山岳を参拝地として機能させてきた人々、すなわち強力や持子といった肉体労働者を研究対象とすることは少なかった」ことを指摘した〔筒井2004：76〕。その上で、「山岳が参拝地として機能する背景を正確に把握するためにも、山岳を聖地として利用する人々、すなわち山岳を祀る社寺や崇敬者にとって強力などの肉体労働がいかに重要な存在であったか」考察することの必要性を訴えた〔筒井2004：76-77〕。

また、小林奈央子は、木曾御嶽山の女性強力の実態について、「御嶽講の登拝によって欠くべからざる存在でありながら、今まで御嶽講の強力に言及した論考はない。さらに女性の強力に至っては、その存在すら知られていないのが実情である」と述べ、これまで光が当てられる機会が少なかった女性強力が担った仕事内容と、強力として働く当事者たちにとっての木曾御嶽山での労働の意味を論じている〔小林2013：66〕。

そして、筒井、小林の問題意識を引き継いで、筆者は、武州御嶽山の宿坊における御師の妻の役割を検討した [高田2018]。武州御嶽山では、宿坊運営の実務を担うのは、御師の妻であり、彼女たちの働きによって、宿坊が円滑に運営されていることを明らかにした。また、宿坊運営を通して、御師の妻は一山の運営に大きな力を発揮していることを指摘した [高田2018]。

このように、ホスト側の社寺や聖地には、宗教的職能者以外にも、維持、運営のために、労働力を提供する強力や宿坊で働く人々など、社寺や聖地を支える人々が存在することが確認できる。

## 2 聖地巡礼研究

これまで、社寺参詣研究について概観してきた。社寺参詣においては、参詣地を機能させるために働く様々な担い手が存在する。また、聖地巡礼においても、その仕組みを維持するための担い手があり、各担い手同士の関係性や、彼らの相互作用に注目して研究が蓄積されてきた。ここでは聖地巡礼研究<sup>4</sup>における、四国遍路での接待や、サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼におけるオスピタレーロに注目した研究を挙げる。

浅川泰宏は、四国遍路において遍路道を外れる遍路の存在に注目し、なぜ彼らが遍路道を外れるのかという問題を検討した [浅川2001]。その際、四国遍路における巡礼者を「巡る人」、遍路ではない一般の人々である地元住民を「巡られる人々」と位置づけた上で、巡られる人々は、社会的弱者が多いといわれる巡礼者と日常的に接し、乞食・接待を通して彼らを経済的にサポートする役割を担っていることを指摘した [浅川2001]。

上記の視座から、「理想的には巡礼体系と無関係ながら、しかし巡礼者が接待を求めてやって来るが為に、巡礼者と日常的な関わり合いを持ち、その結果、巡礼体系の一部として組み込まれた社会的空間」を「乞食圏」という言葉で概念化した [浅川2001: 35]。そして、日常的に接待を行うことで巡礼者をサポートし、四国遍路を支えた「巡られる人々」の存在の重要性を主張している [浅川2001: 65]。

このような、四国遍路を支える地域住民の「巡られる人々」は、札所となっている寺院で遍路を迎える僧侶などの宗教的職能者とは異なる性格を持ちながらも、四国遍路を構成する一員として、四国遍路を維持していくために必要な存在であるといえよう。

また、浅川が指摘した、地元住民の「巡られる人々」のように、巡礼体系の一部として組み込まれ、巡礼を支える人々について論じた研究として、岡本亮輔のサンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼に関する研究が挙げられる [岡本2012、2015]。岡本は、サンティアゴ巡礼の巡礼宿で働くオスピタレーロと呼ばれるサポーターの役割について言及している [岡本2012、2015]。

オスピタレーロは、巡礼宿を管理し、巡礼者の受け入れ業務に携わる人々を指す。彼らは何度もサンティアゴ巡礼を行ったことのある経験者でもあり、巡礼の最中に、より多くの巡礼者と知り合い、交流することを目的に、巡礼宿で食事準備や巡礼者の受付、清掃などの仕事を行い、自身の巡礼体験を元に他の巡礼者に助言しながら、2週間から1ヶ月程度スタッフとして働くという [岡本2015: 75]。

岡本は、巡礼者でありながら、他の巡礼者にボランティア的に関わるオスピタレーロの存在を「ゲストのホスト化」した状態と捉え、巡礼者同士で取り結ぶ関係性を「ホスト・ゲス



トの協働」と呼んでいる〔岡本2012〕。オスピタレーロは、自身も巡礼者であるが、他の巡礼者が巡礼を続けていけるようにサポートするという点では、接待を通して四国遍路を支える「巡られる人々」と共通する部分があると考えられる。上記のような聖地巡礼研究における、巡礼を支える人々に注目する視点は、社寺参詣研究をはじめ、様々な研究において共有することが可能だろう。

### 3 宗教とツーリズム研究

これまで、社寺参詣研究や聖地巡礼研究を、担い手に注目して概観してきた。上記二つの流れを汲む研究として、宗教とツーリズムに関する研究が挙げられる。ここでは、宗教ツーリズム研究において何が問われてきたのかを、引き続き、担い手という観点から整理していきたい。まず、宗教ツーリズム研究は、観光人類学のホスト・ゲスト論を援用する形で議論が進められていく。

観光人類学においては、観光客をゲスト、観光客を受け入れる地域や社会をホストと位置づけ、観光活動にまつわる様々な事象を、両者の関係性に注目して把握しようとする試みがなされてきた。このような視点を宗教ツーリズム研究で用いると、参詣地とされる社寺や聖地と、その運営に関わる人々がホスト、参詣地とされる社寺や聖地を訪れる人々がゲストとなるだろう。また、宗教ツーリズムにおけるホストは、訪れる場所として意味づけがなされている場所という意味で使用されることもあり、必ずしも参詣地や聖地のみがホストと観念されるわけではない<sup>5</sup>。

ホストと対の関係になるゲストも、特定の信仰を持ち、宗教実践を行う参詣者もいれば、信仰を目的としない観光客と呼ばれるような人々も存在する。宗教ツーリズムの研究においては、信仰を持たないゲストによる消費活動の一環としてのツーリズムを対象とする研究も蓄積されている<sup>6</sup>。

加えて、ホストとゲストを取り結ぶ観光会社や鉄道会社などのメーカー、コーディネーターと呼ばれる担い手に注目する研究成果も提出されている。對馬路人は、関西の私鉄が、霊場、聖地と呼ばれるような場所に鉄道を敷設し、時には、参詣客の動員のために、霊場や聖地に対して様々な働きかけを行ったことを明らかにした〔對馬2012、2018〕。併せて、對馬は鉄道会社が、世俗的なエージェントでありながら、霊場や聖地の参詣者を増やすために、積極的に戦略を立て、実行する過程で、霊場や聖地の宗教行為を独自に編集する、もしくは新たな宗教習俗を普及させるなど、霊場、聖地をコーディネートする役割を担ったことを指摘した〔對馬2012、2018〕。

また、鉄道会社による社寺仏閣、聖地への働きかけと、両者の関係性について検討した研究として、卯田卓矢や平山昇の研究が挙げられる。

卯田は、近代以降の参詣地が鉄道網の発達によって観光化していく過程を、比叡山延暦寺を事例に、ホストである社寺側から検討している。加えて、卯田は、戦後の延暦寺で、参拝客誘致のために新設された部署に注目して、延暦寺の僧侶が一般参詣客に対してどのような働きかけを行っていたのか明らかにしている〔卯田2015〕。

交通網の発達と初詣の誕生の関係を研究している平山は、鉄道網の発達によって休日の郊外行楽として社寺を参詣する「普通の参詣人」が誕生したことを指摘している〔平山2012、2015〕。その際、平山は、近代の社寺参詣を、特に訪れる側から検討しており、参詣する人々

の階層や性別、年齢、組織形態に着目して、分類を行った [平山2019]。

以上、参詣地や聖地などに訪れるゲストと、ゲストを受け入れる参詣地や聖地などのホストの間を取り結ぶメーカー、コーディネーターと呼ばれる担い手を対象化している研究を概観した。上述の研究においては、鉄道会社が、社寺や聖地を持つ宗教資源を編集したり、新たな宗教行事を創出したり、元々の宗教組織を変容させたりする事例が報告されている。このことから、社寺や聖地は、ツーリズムの視点を取り入れ、当地の持つ資源や組織を変化させ、新たな行事を創出しながら、時代の流れに対応した社寺運営、聖地運営を行ってきたといえよう。

また、宗教ツーリズムにおけるメーカー、コーディネーターを事例とする研究の中でも、ホスト側の視点を持つ研究と、ゲスト側の視点を持つ研究があることが確認された。平山が論じるように、一言で参詣者と言っても、その内実は一括りにすることは難しく、多様な社会階層や性別、年齢、来訪の目的も異なる人々が存在していることは、今後の研究において留意されるべきことだろう。

#### 4 まとめ

以上、社寺参詣研究及び聖地巡礼研究、そして、宗教ツーリズムの研究について確認してきた。社寺参詣研究においては、主に、参詣地である社寺の運営に関わる宗教的職能者と、参詣者の二つの担い手に焦点を当て、宗教的職能者や参詣者の活動内容について論じる傾向が見られた。また、聖地巡礼研究においては、聖地を維持、管理する宗教的職能者と巡礼者の二者に加えて、巡礼者の世話し、巡礼地を機能させる働きを担う地元住民や、何度も巡礼の経験があり、自身の持つ知識や技術を他の巡礼者に伝える、サポーターの役割を果たす人々に注目する研究成果が提出されていることが明らかになった。

このことから、社寺参詣や聖地巡礼にまつわる営みには、多様な担い手が関わっているといえる。また、これまで社寺参詣研究や、聖地巡礼研究の枠組みで扱われてきた、社寺や聖地に訪れる行為を、ツーリズムという視点で捉え返した宗教ツーリズム研究においては、様々な種類の担い手を、観光人類学における議論を援用しながら、ホストやゲスト、メーカー、プロデューサーなどの枠組みに分類することで整理し、その特徴を分析してきた。

なかでも特に、メーカーやプロデューサーと呼ばれる担い手を対象とする研究において、ホストである社寺や聖地を取り巻く環境を変化させたり、社寺や聖地の運営に携わる人々の仕事内容を、変容させたりする事例が確認された。

また、多様な担い手が、社寺や聖地を維持、運営していく際に、どのような役割を果たしているのかという点を、通史的に追いながら、変化の過程をも明らかにしようとする意識を持った研究の蓄積が今後求められる。

このように、現代における社寺や聖地が直面している問題を、ツーリズムの視点を用いながら、歴史的変遷をも含めて検討していくことで、現代の社寺や聖地を取り巻く社会状況および、それらを包括する宗教という概念を捉える一助になるのではないだろうか。

#### おわりに

本稿では、ツーリズムを社寺や聖地の運営における一つの戦略として捉え、ツーリズムが社寺や聖地にどのような影響や変化をもたらしたのか、担い手に注目することで検討を行っ

た。

ホスト側の社寺や聖地には、運営に直接的に関わる宗教的職能者以外にも、社寺や聖地を維持、機能させるために働く人々が存在する。また、社寺や聖地を訪れるゲスト側にも、信仰を持っているか持っていないか以外にも、その場所に何度も訪れているリピーターなのか、初めて訪れた一見の人なのかなど、ゲストと呼ばれる担い手を捉える尺度が存在するだろう。

そして、ホストとゲストをつなぐ、メーカーやプロデューサーにも、旅行会社や鉄道会社などの産業セクターや企業以外の、地域住民や経験豊富なゲストなどが存在する。そのため各担い手の役割や具体的な仕事内容、当事者たちの意識をも含めて議論していくことで、社寺や聖地の維持、運営を取り巻く状況をより鮮明に捉えることが可能になるのではないかと。

今後の研究においては、ホストやゲスト、メーカーやプロデューサーなどの各担い手が、どのように関連しているのか、また、どのような人々の力によって社寺や聖地が維持、運営されているのかを、彼らの具体的な働きを含めて明らかにする態度が求められるだろう。

## 注

- 1 宮家準編1985『御嶽信仰』、下出積典編1986『白山信仰』、平野栄次編1987『富士浅間信仰』、宮家準編1990『熊野信仰』、圭室文雄編1992『大山信仰』。
- 2 主要な山岳信仰の研究として、岩鼻通明1992『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』、廣渡正利1994『英彦山信仰史の研究』、由谷裕哉1994『白山・石動修験の宗教民俗学的研究』、菅原寿清2002『木曾御嶽信仰—宗教人類学的研究—』、福江充2002『近世立山信仰の展開—加賀藩芦峯寺衆徒の檀那場形成と配札—』、中山郁2007『修験と神道のあいだ—木曾御嶽信仰の近世・近代—』、西海賢二2008『富士・大山信仰』、西村敏也2009『武州三峰山の歴史民俗学的研究』など。
- 3 また、山中弘は、近年、山岳信仰の再評価が行われるようになっており、特に、山岳信仰の文化遺産としての側面に光が当たっていると述べている〔山中2016：151〕。例えば、熊野や吉野、富士山などが世界遺産に指定されたことなどが契機となり、これまで日本の宗教文化や伝統といった文脈で語られてきた山岳信仰が、観光資源として見出される事例が報告されているという〔山中2016：151〕。
- 4 真野俊和1980『旅のなかの宗教 巡礼の民俗誌』、星野英紀2001『四国遍路の宗教学的的研究—その構造と近現代の展開—』、浅川泰宏2008『巡礼の文化人類学的的研究—四国遍路の接待文化—』などの研究成果が挙げられる。
- 5 例えば、アニメの舞台になった場所を訪れる活動をアニメ聖地巡礼と呼ぶ場合がある。
- 6 山中弘2017「消費社会における現代宗教の変容」、山中弘編2020『現代宗教とスピリチュアルマーケット』など。

## 参考文献

- 浅川泰宏2001「遍路道を外れた遍路—新しい巡礼空間モデルの構築に向けて—」『日本民俗学』226号、35-69頁。
- 2008『巡礼の文化人類学的的研究—四国遍路の接待文化—』古今書院。
- 天田顕徳2019『現代修験道の宗教社会学—山岳信仰の聖地「吉野・熊野」の観光化と文化資源化—』岩田書院。
- 岩鼻通明1992『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』名著出版。
- 卯田卓也2015「戦後の延暦寺における参拝者誘致活動とツーリズム」『旅の文化研究所研究報告』25号、93-110頁。



- 岡本亮輔2012『聖地と祈りの宗教社会学—巡礼ツーリズムが生み出す共同性—』春風社。  
———2015『聖地巡礼—世界遺産からアニメの舞台まで—』中央公論新社。
- 小林奈央子2013「御嶽講登拝を支えた女性強力」『宗教民俗研究』21・22号、65-87頁。
- 櫻井徳太郎1962『講集団成立過程の研究』吉川弘文館。
- 下出積與編1986『白山信仰』雄山閣出版。
- 新城常三1982『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房。
- 真野俊和1980『旅のなかの宗教 巡礼の民俗誌』日本放送出版協会。
- 菅原寿清2002『木曾御嶽信仰—宗教人類学的研究—』岩田書院。
- 高田彩2018「宿坊経営における女性家族の役割—武州御嶽山を事例として—」『國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報』11号、70-87頁。
- 圭室文雄編1992『大山信仰』雄山閣出版。
- 對馬路人2012「鉄道と霊場—宗教コーディネーターとしての関西私鉄」『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続』、32-57頁。  
———2018「コーディネートされる宗教—近現代日本における「世俗的宗教コーディネーター」の台頭は伝統宗教と人々の関わりは何をもたらすか—」『関西学院大学社会学部紀要』128号、37-56頁。
- 筒井裕2004「昭和中期における鳥海山山中への物資運搬—吹浦口ノ宮からの運搬を中心に—」『日本民俗学』240号、76-92頁。
- 中山郁2007『修験と神道のあいだ—木曾御嶽信仰の近世・近代』弘文堂。
- 西海賢二2008『富士・大山信仰』岩田書院。
- 西村敏也2009『武州三峰山の歴史民俗学的研究』岩田書院。
- 原淳一郎2007『近世寺社参詣の研究』思文閣出版。
- 平野栄次編1987『富士浅間信仰』雄山閣出版。
- 平山昇2012『鉄道が変えた社寺参詣—初詣は鉄道とともに生まれ育った—』交通新聞社。  
———2015『初詣の社会史—鉄道が生んだ娯楽とナショナリズム—』東京大学出版会。  
———2019「近代の社寺参詣をめぐって—その視角と方法に関する試論—」『交通史研究』94号、1-21頁。
- 廣渡正利1994『英彦山信仰史の研究』文献出版。
- 福江充2002『近世立山信仰の展開—加賀藩芦峯寺衆徒の檀那場形成と配札—』岩田書院。
- 星野英紀2001『四国遍路の宗教学的的研究—その構造と近現代の展開—』法蔵館。
- 宮家準編1985『御嶽信仰』雄山閣出版。  
———1990『熊野信仰』雄山閣出版。
- 山中弘2016「宗教ツーリズムと現代宗教」『観光学評論』4巻2号、149-159頁。  
———2017「消費社会における現代宗教の変容」『宗教研究』91巻2号、255-280頁。
- 山中弘編2012『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続』世界思想社。  
———2020『現代宗教とスピリチュアルマーケット』弘文堂。
- 由谷裕哉1994『白山・石動修験の宗教民俗学的研究』岩田書院。